

## 第 15 章

### ギッシング関連情報

(Gissing Information Resources)



The Gissing's family home  
Thompson's Yard, Wakefield  
Ink and watercolour by Joe Clay  
© The Gissing Trust, Wakefield

## 第 1 節 学術雑誌と国際会議

1964年の夏、ジェイコブ・コールグ氏は大英博物館で研究する機会を利用し、ギッシングについて以前から手紙のやりとりがあったフランスのピエール・クスティヤス氏と日本の小池滋氏との待望の面会を果たした。3人は博物館とその周辺でランデブーを重ね、それまで手紙で取り交わしていた情報を多くの人に流す媒体として、『ギッシング・ニューズレター』の刊行を決意するに至った。そして数週間後、コールグ氏がマンチェスターのロウゼンガーテン氏 (Herbert Rosengarten) をリクルートし、ここに国籍が異なる4人の研究者によってギッシング関連情報を交換する場ができた。

それから4年後の1969年1月、クスティヤス氏がコールグ氏の衣鉢を継いで編集長となり、ギッシングがガブリエル・フルリとのランデブーを楽しんだサリー州ドーキングで書店を営むコウラ氏 (Chris Kohler) を事務局長とし、ここから『ニューズレター』が発行されるようになった。そして1991年1月に、名称は『ギッシング・ジャーナル』に変更された。発行所もギッシングの故郷ウェイクフィールドに移り、事務局は1978年に設立された「ギッシング・トラスト」(The Gissing Trust) に置かれ、副業として古書を扱っているブラッドフォード在住のスティントン氏 (Ros Stinton) が商業サイド、すなわち購読者管理と発送を担当することになった。編集長クスティヤス氏の仕事は、40年来すべてのタイピングを担当しているエレヌ夫人と彼女の有能なコンピュータ操作に支えられている。

残念ながら、日本だけでなく海外にも正式なギッシングの学会はない。従って、この『ギッシング・ジャーナル』がギッシング研究者と愛好者をグローバルに結び付けている唯一の媒体である。これは1年に4回(1月、4月、7月、10月)発行される季刊誌で、購読者は2年ごとに会費——年会費は個人が10ポンド、図書館が15ポンド——を払うことになっている。ポンド仕立ての小切手か、郵便局で作成する国際郵便為替 (International Postal Money Order) かを、所定の住所 (The Gissing Journal, 7 Town Lane, Idle, Bradford BD10 8PR, United Kingdom) へ送るだけでよい。現在の編集委員はクスティヤス氏、コールグ氏、小池氏、そして2000年から加わったバウア・ポストマス氏 (Bouwe Postmus) の4人である。雑誌の構成は論文が数点、書評、お知らせ、最近の出版物の紹介などで、目次に関しては毎号、編者のウェブ・サイト (Gissing in Cyberspace) で紹介している。なお、論文と書評については、『ニューズレター』の創刊号から『ジャーナル』の最新号

まで、編者とクスティヤス夫妻とで全部を書き出して作成した一覧表が、ネット上で公開されている <<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/gissing/gg-journal.html>> (以下、編者のウェブ・サイトについてはホームページのアドレス部分を省略する)。

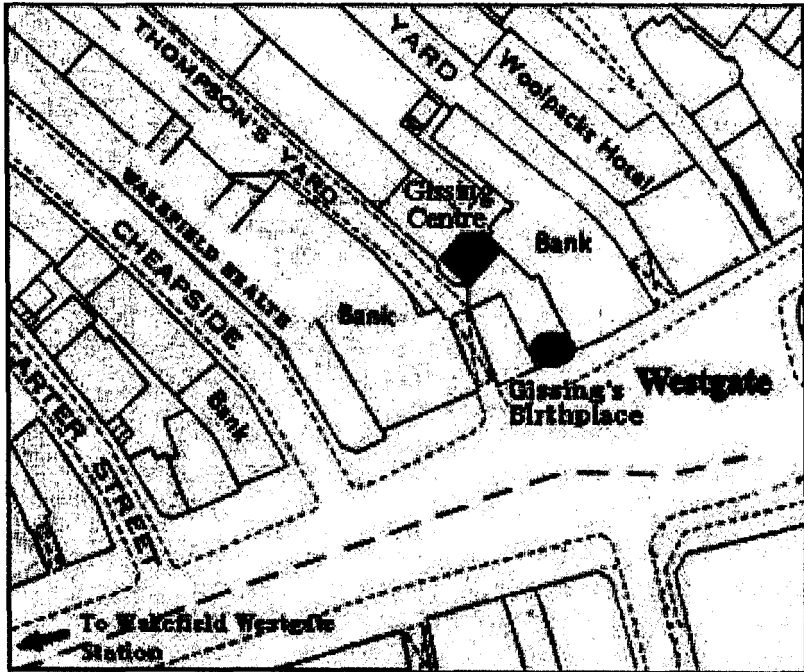
まだ正式の学会はないものの、初めての国際会議 (The International George Gissing Conference) が、1999年9月9日から3日間、『ジャーナル』の編集委員ポストマス氏の勤務校、アムステルダム大学で開催された。世界各国から75名以上もの研究者や愛好者 (日本からは小池、北條、太田、小宮の各氏) が一同に会し、31件の研究発表と編者たちによる『「ジョージ・ギッシング書簡集」を編集して』という題目のパネル・ディスカッションがあった。日本からは東京女子大学の北條文緒氏が“Gissing and his Japanese Readers”という題目で発表した。この国際会議の成果はポストマス氏の編集による『ギッシングにいただく花冠』(A Garland for Gissing, Amsterdam: Rodopi, 2001) として公刊されている。次の国際会議は没後100年の記念大会 (The Centenary Conference) で、2003年7月24日から26日までロンドン大学とグラモーガン (ウェールズ南東部の旧州) 大学の協賛で開催された。テーマは「ギッシングと都市」で、スラム街や労働者階級の生活、大衆社会の発展、文筆家の生活、教育、女性の権利などに関する31件の研究発表があり、88名が参加した。日本からは東京大学の吉田朱美氏が“The Complex Problem of a Woman Violinist in *The Whirlpool*”という題目で発表した。そして、掉尾を飾った記念講演はピエール・クスティヤス氏の“Gissing, A Life in Death: A Cavalcade of Gissing Criticism in the Last Hundred Years”で、本書の第2章はその原稿を事前に訳したものである。

## 第2節 ギッシング・トラストとギッシング・センター

ギッシングの生家 (60 Westgate, Wakefield, West Yorkshire, WF1 2TP <[gissing/gg-trust.html](http://gissing/gg-trust.html)>) は Wakefield Westgate 駅の南端から東北東へ走るウェストゲイト通り60番地 (当時は55番地) に現在も残っている。その家は奥に長細い奇妙な形をしたレンガ造りの3階建てで、ギッシングの父は通りに面した1階で薬局を営んでいた。この生家の現在の所有者は Wakefield Metropolitan District Council <<http://www.wakefield.gov.uk/>> で、両隣の銀行 (National Westminster Bank) が建物の一部を「ギッシング・センター」(The Gissing Centre) としてギッシング・トラストに使用させることを条件に賃借

りしている。

ギッシング関係の資料を展示するギッシング・センターはギッシング家の住居の一部 (2/4 Thompson's Yard), つまり生家の左側から始まる路地に入っ  
てすぐ右手にあるジョージ王朝様式の建物の2階にある。玄関右側の銅製の  
銘板には, "This tablet was erected to commemorate the birthplace of George  
Robert Gissing (1857-1903) Novelist and Man of Letters" と記されている。  
第1章「ギッシングの生涯」の最初に掲載した写真は, 1990年のギッシング・  
センター設立時に, 「ジョージ・ギッシングとウエイクフィールド」(1980)の  
著者ブルック氏 (Clifford Brook) がウェストゲイト通りから生家を撮影した  
ものである。向かって左側にはトンプソンズ・ヤードの入口があり,  
"Britannic Assurance" という看板がかかった右隣は, 現在は "The Cave" と  
いう名前のレストランになっている。更に右隣の建物(現在は銀行の支店長や  
スタッフの部屋として使用中) がギッシングの父の店だった所で, この上の階  
でギッシングは生まれた。



ギッシング・トラストは、ウェイクフィールド市民協会、ウェイクフィールド歴史協会、そして世界中の研究者たちによって、ギッシング・センターの施設、ギッシング関連の財産保護、ギッシングとウェイクフィールドの文学史に関係する購入品の管理と展示、そしてそれらの研究を促進することを目的として設立された。現在の会長はウェイクフィールド市民協会の評議委員であるモーガン女史(Margaret Morgan)で、主たる仕事はギッシング・センターの運営維持と『ギッシング・ジャーナル』の出版であるが、後者はいわゆる名義貸しで実際にはクステイヤス氏の仕事になっている。

ギッシング・センターは、(今も電気代と水道代を払っている) ナショナル・ウェストミンスター銀行の援助を受け、ギッシング・トラストによって1990年5月5日(土)に設立された。現在は5月から9月まで毎週土曜日の2時から4時まで開館している。入場無料。ギッシング家の思い出の品々やギッシング関係の書籍が展示され、ギッシングの生涯とウェイクフィールドを舞台とした小説『人生の夜明け』に関するビデオ(館内上映)や、1976年のブッカー賞受賞作品 *Saville* で有名な郷土出身作家、デイヴィッド・ストーリー(David M. Storey, 1933-)の展示品などがある。『サヴィルの青春』(橋口稔訳, 集英社, 1983年)もまたウェイクフィールドでの著者の生活が詳述されている。ストーリーの弟と同級生だったペティト氏(Anthony Petyt, 30 The Spinney, Sandal, Wakefield, West Yorkshire WF2 6JN; Tel. 01924 255047; E-mail storiths@tiscali.co.uk)が、1986年からギッシング・トラストの事務局長としてギッシング・センターの運営維持に尽力している。事前に相談すればグループ・ツアーなどの準備をしてもらえる。

### 第3節 インターネット上のギッシング

#### メーリング・リスト

##### ① The George Gissing Discussion List

<<http://greatnorthern.demon.co.uk/mailman/listinfo/gissing/>> 電子メールを使ってギッシングの生涯と作品についての議論や情報交換ができる専用のメーリング・リスト。没後100年を記念して2003年6月に開設されたばかりである。開設したのはブリストル海峡に臨む自治都市(Weston-super-Mare)の地方教育当局に勤務するマイク・ニューマン氏(Mike Newman)。上記URLのサイトでメール・アドレスとパスワードを入力して“Subscribe”のボタンを押せば、すぐに登録確認のメール(Subject: confirm)が送られてくるので、

指定された確認用サイトにアクセスして“Subscribe to list Gissing”をクリックするだけで、このリストへの登録が完了する。

## ② The VICTORIA List

<<http://listserv.indiana.edu/cgi-bin/wa?SUBED1=victoria&A=1>> ヴィクトリア朝の作家と社会全般を対象としたメーリング・リスト。現在の登録者数が約2,000人に及ぶ大所帯のリスト。1993年の開設以降の投稿をすべて保管しており、その巨大なアーカイヴ (Search the VICTORIA Archives <<http://listserv.indiana.edu/cgi-bin/wa?S1=victoria>>) をウェブ上で検索できる。ちなみに、ここでギッシングを検索すると、1994年10月19日の最初の投稿から数えて合計420通(2003年5月24日現在)がヒットする。

## ウェブ・サイト

### ① Gissing in Cyberspace

<<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/gissing/>> 1995年11月22日に編者が開設したサイト。新着情報、作品、翻訳、ギッシング・トラスト、【ニューズレター】と【ジャーナル】の目次一覧、クスティヤス編集長の挨拶、コールグ氏のギッシング伝、ギッシング文献一覧、年譜、メッセージ・ボード、学会案内、リンク集などがある。このサイトの目玉商品は開設以来オンライン化に努めてきた電子テキストで、ギッシングのほとんど全ての作品が揃っているので、絶版になっている長篇小説や入手困難な短篇小説などが簡単にダウンロードして読める。

### ② The George Gissing Web Site

<[http://ehlt.flinders.edu.au/english/Gissing/Gissing\\_HomePage.htm](http://ehlt.flinders.edu.au/english/Gissing/Gissing_HomePage.htm)> 南オーストラリアのフリンダース大学助教授で、2002年に Grant Allen (1848-99) の書誌を出版したピーター・モートン氏 (Peter Morton) による学術面に特化したサイト。【ヘンリー・メイトランドの私生活】の電子テキストに加え、電子化されたギッシング関連の論文(例えば、【無階級の人々】、【サーザ】、【女王即位50年祭の年に】、【余計者の女たち】に関する作品論)や書評が数多く格納されている。その他、ヴァンダービルト大学教授ジョン・ハルペリン氏の著書 (*Gissing: A Life in Books*, 1981) から許可を得て再掲した「ギッシング作品の年代順リスト」、そして同書の補遺 (“Some Notes on the Gissing Revival, 1961-68,” Halperin 363-67) にモートン氏がそれ以後のギッシング研究の概説を書き加えた「1961年以降のギッシング研究の状況」が特に有益である。

③ The Victorian Web: George Gissing

<<http://www.victorianweb.org/authors/gissing/gissingov.html>> ハイパーテキストを現代批評理論とからめて論じた *Hypertext: The Convergence of Contemporary Critical Theory and Technology* (The Johns Hopkins UP, 1992) の著者で、米国ブラウン大学のランドウ教授 (George P. Landow) による The Victorian Web に収められたサイトであるが、他の有名作家のサイトに比べると質量ともに見劣りがする。編者の電子テキストと上記②のモートン氏が担当したページが幾つかある。

④ The Literary Encyclopedia and Literary Dictionary

<<http://www.literarydictionary.com/php/speople.php?rec=true&UID=5136>> ギッシングの担当は *The Paradox of Gissing* の著者でオックスフォード大学勤務の David Grylls 氏 <<http://www.kellogg.ox.ac.uk/fellows/gryllsd.htm>>。

⑤ W. T. Young. "George Gissing."

<<http://www.bartleby.com/223/1413.html>> *The Cambridge History of English and American Literature* (New York: Putnam, 1907-21) の Bartleby.com (2000) 版。ギッシングは第 13 巻 (The Victorian Age, Part One) の第 14 節 (George Meredith, Samuel Butler, George Gissing) 13-20。

⑥ The Gissing Archives

<<http://greatnorthern.demon.co.uk/pipermail/gissing/>> ギッシング専用のメーリング・リストにおける過去の投稿を格納したサイト。

⑦ Clara Collet and George Gissing

<<http://www.clara-collet.co.uk/gissing.htm>> クララ・コレットとギッシングとの関係を概説したサイト。コレットについては本書第 1 章の註 50 を参照。

⑧ Dictionary of Literary Biography: George Gissing

<[gissing/gg-dlb.html](http://gissing/gg-dlb.html)> コールグ氏が *DLB* の第 18 巻 (Victorian Novelists After 1885, edited by Ira B. Nadel and William E. Fredeman, Gale Research Inc., 1983) に書いたギッシングの項目のオンライン版。本書第 1 章の出典。

⑨ Gissing's Writings on Dickens: A Bio-bibliographical Survey

<[gissing/gg-cd.html](http://gissing/gg-cd.html)> クステイヤス氏が 1969 年にエニサーモン社から出した著書のオンライン版。

⑩ George Gissing's Grave

<[gissing/gg-grave.html](http://gissing/gg-grave.html)> サン・ジャン・ド・リューズにあるギッシングの墓。

⑪ Wakefield Historical Society

<<http://www.wakefieldhistoricalsoc.org.uk/>> 1978年のギッシング・トラスト設立に加わったウェイクフィールド歴史協会のホームページ。

⑫ The John Rylands University Library: George Gissing Collection

<<http://rylibweb.man.ac.uk/data2/spcoll/gissing/>> マンチェスター大学のジョン・ライランズ大学図書館所蔵の初版本コレクション(全100点)。

## 第4節 テキスト、書簡、古書、映画

### テキスト

選集として定評があるのは、ジョン・スピーアーズが担当して18タイトルを出した Harvester Press 版、5タイトルを出した Hogarth Press 版とエヴリマンズ・ライブラリーの J. M. Dent 版、そして18タイトルを複製させた AMS Press 版(現在も入手できるのは、*The Crown of Life*, *Demos*, *Denzil Quarrier*, *The Emancipated*, *In the Year of Jubilee*, *The Odd Women*, *Our Friend the Charlatan*, *The Whirlpool* の8作品で、値段は39ドルから115ドル)がある。国立情報学研究所(National Institute of Information)の総合目録データベース WWW 検索サービス(NACSIS Webcat <<http://webcat.nii.ac.jp/>>)で検索すれば、どこの大学図書館にどの版があるか、すぐに分かる。ちなみに著者名(Gissing)では300件ほどがヒットする。

オンラインショップなどを通して現在でも購入可能なペーパーバックには次のようなものがある。ただし、校訂版か序文や注釈つきの版に限定する。

### Everyman Paperback Classics (London: J. M. Dent):

*Born in Exile*. Ed. David Grylls. 1993.

*The Day of Silence and Other Stories*. Ed. Pierre Coustillas. 1993

*In the Year of Jubilee*. Ed. Paul Delany. 1994.

*The Whirlpool*. Ed. William Greenslade. 1997.

*New Grub Street*. Ed. D. J. Taylor. 1997.

### Oxford World's Classics (Oxford: Oxford UP)

*The Nether World*. Ed. Stephen Gill. 1992.

*New Grub Street*. Ed. John Goode. 1999.

*The Odd Women*. Ed. Patricia Ingham. 2000.



**Penguin Classics (Harmondsworth: Penguin)**

*New Grub Street*. Ed. Bernard Bergonzi. 1976.

*The Odd Women*. Ed. Elaine Showalter. 1995.

**Broadview Literary Texts (New York: Broadview)**

*The Odd Women*. Ed. Arlene Young. 1998.

**W. W. Norton & Company (New York: W. W. Norton)**

*The Odd Women*. Introd. Marcia R. Fox. 1993.

**Modern Library Classics (New York: Modern Library)**

*New Grub Street*. Introd. Francine Prose. 2002.

**Farleigh Dickinson UP**

*Thyrza: A Tale*. Ed. Jacob Korg. 1975.

*The Unclassed*. Ed. Jacob Korg. 1976.

**Routledge & Kegan Paul**

*A Life's Morning*. Ed. Pierre Coustillas. 1985.

*Workers in the Dawn*. Ed. Pierre Coustillas. 1985.

**Audio Cassettes (Audio Book Contractors)**

*The Private Papers of Henry Ryecroft*. Narr. Grover Gardner. 2001.

電子テキストは、編者が1995年秋にギッシングのホームページを立ち上げた時から電子化に努めてきたので、ほとんど全部の作品が—まだ誤字脱字は残っているが—揃っている。また、本書の第12章「その他の長篇・中篇小説」の出典であるコールグ氏の著書 (*George Gissing: A Critical Biography*, 1963) も許可を得て電子化した。2003年4月からは Google を使ったサイト内検索がギッシングのホームページでできるようになったので、この検索をコンコーダンスとして使うことも可能である。例えば、“Gissing” と “alienation” を鍵語として Google を使ってウェブ全体で検索すると、あまり関係のないサイトを含めて200件以上がヒットするが、サイト内検索にすると8件に絞り込まれ、『暁の労働者たち』、『流謫の地に生まれて』、『ヴェラニルダ』、『時計塔の明かり』で1回、『ヘンリー・ライクロフトの私記』で2回使われていることが即座に分かる。『三文文士』に “alienation” という単語が出ないのは意外だが、“alien” は5回ほど使われている。KWIC (key word in context) コンコーダンスのソフトを使えば、次の例 (『三文文士』の “alien”) ように鍵語がその前後のコンテクストを伴って隣時にアルファベット順に表示される。推薦したいフリーウェアは、日本大学の塚本聡氏作成の KWIC

Concordance for Windows <[http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng\\_dpt/tukamoto/kwic.html](http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/tukamoto/kwic.html)> と Summer Institute of Linguistics の Conc for the Macintosh <<http://www.sil.org/computing/conc/conc.html>> で、コーパス研究者の間では「英独仏の欧文のテキストデータ（コーパス）を検索し、コンコーダンス、文脈、頻度、コロケーションの多面的な角度から検索結果を分析」できる赤瀬川史朗氏によるシェアウェア TXTANA <[http://www.biwa.ne.jp/~aka-san/txtana\\_learning.htm](http://www.biwa.ne.jp/~aka-san/txtana_learning.htm)> が有名である。

4675	small importance in	<b>Alfred's</b> life; his difficult
3279	readers, and this was	<b>alien</b> to the natural working of his
9835	way to an impulse so	<b>alien</b> to his true feelings; anger only
12852	to addressing them in	<b>alien</b> tongues; he and they had no
14020	a new life of her own	<b>alien</b> to, and in some respects
18546	with a kind of reading	<b>alien</b> to Reardon's sympathies.
20479	whilst he kept his pipe	<b>alight</b> . 'I think Letters wouldn't be

### 書簡

本書巻頭の「文献一覧」で分かるように、ギッシングの書簡集は文通相手によって個別に出版されていたが、この出版史はポール・F・マシアスン、アーサー・C・ヤング、ピエール・クスティヤスの共同編集でオハイオ大学出版局から全9巻の『ジョージ・ギッシング書簡集』(*The Collected Letters of George Gissing*)の第1巻が上梓された1990年に新たな局面を迎えることになった。この壮大なプロジェクトは四半世紀の準備を必要としたそうだが、第9巻を出版した1997年に無事終了した。1995年に第7巻を出したあと、MLAのMorton N. Cohen賞を与えられている。各巻には、それぞれの期間におけるギッシングの生涯に関する様々な事実を提示した序文が付され、それぞれの手紙には詳細な注釈が丁寧に付けられている。この書簡集はギッシング自身の手紙だけでなく、彼と関係のあった人々(ハーディ、ウェルズ、ジェームズなど)からの手紙も収録され、最終巻には悔やみ状、出版後に発見された手紙、ガブリエル・フルリの回想録が補遺として加えられている。2002年、ニューヨーク公立図書館が購入したコレクションの一部に、编者たちの捜査網にかからなかった6通の手紙が新たに見つかったことを考えると、本書第2章の最後でクスティヤス氏が言及した『書簡集』第10巻の出版は意外と早いかも知れない。なお、この『書簡集』は2003年5月現在、日本の48の大

学図書館に備えられている。<<http://webcat.nii.ac.jp/cgi-bin/shsproc?id=BA10885349>>

### 古書

検索エンジン付きで、ギッシング関連図書がヒットする代表的なサイト。

#### (洋書)

Abebooks <<http://www.abebooks.com/>>

abelibrary.com <<http://www.abelibrary.com/>>

Addall <<http://www.used.addall.com/>>

Alibris <<http://www.alibris.com/>>

Amazon.com <<http://www.amazon.com/>>

HallEnglishClassics.com <<http://hallenglishclassics.com/>>

isbn.nu <<http://www.isbn.nu/>>

Oak Knoll Books <<http://www.oakknoll.com/>>

Powell's Books <<http://www.powells.com/>>

TomFolio.com <<http://www.tomfolio.com/>>

Boston Book Company <<http://www.rarebook.com/website/gissing.html>>

この書店には『条件付きの女相続人』(48部の限定出版)など、ギッシングの多くの初版本を含む171冊のコレクションがある。

Ros Stinton Bookseller <<http://www.abebooks.com/home/idlebooksellers/>>

本章第1節で触れたスティントン氏(7 Town Lane, Idle, Bradford, WY, BD10 8PR, tel: 01274 613737, e-mail: [idlebooks@bd108pr.freerve.co.uk](mailto:idlebooks@bd108pr.freerve.co.uk))はサイドビジネスとしてギッシングを中心に古書を扱っている。定期的にGissing Catalogueが発行され、第3号には500点がリストアップされた。

#### (和書)

日本の古本屋 <<http://www.kosho.or.jp/>>

紫式部 <<http://www.murasakishikibu.co.jp/>>

BOOK TOWN 神田 <<http://www.book-kanda.or.jp/>>

EasySeek <<http://www2.117.ne.jp/~kob/>>

OldBookMark <<http://www.crypto.ne.jp/oldbookmark/>>

## 映画

ハリウッドをピラミッドの頂点とする映画界では、1つの文学作品が何回も映画化されているシェイクスピアやディケンズのような寵児は少なく、1つの作品が1回しか映画化されない孤児は数えきれない。もっとも、ギッシングの場合は1つの作品と言っても、1921年のイギリス映画『民衆』(白黒、サイレント)しかない。これは *Why Men Forget* というタイトルでアメリカでも同時に封切られた。監督は『民衆』と同じ1921年にオスカー・ワイルドの *A Woman of No Importance* (1893) やアーノルド・ベネットの *The Old Wives' Tale* (1908) といった文学作品を撮ったアメリカ人のデニソン・クリフト (Denison Clift, 1885–1961)。主人公リチャード・ミューティマーに抜擢された Milton Rosmer (1881–1971) は、クリフト監督の『なんでもない女』で政治家イリングワース卿 (Lord Illingworth) を、A. V. Bramble (1880–1963) 監督の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1920) ではヒースクリフを演じている。

一般読者に迎合しなかったギッシングの作品が映画化される見込みは今後ほとんどないだろう。ラジオドラマや朗読でギッシングを取り上げたことが何度かある BBC が、クラシック・ドラマのシリーズで取り上げてくれることを期待するしかない。

## 第 5 節 日本におけるギッシング

## 研究書

織田正信『ギッシング』(研究社英米文学評傳叢書-67-) A6 判, 135 頁, 研究社, 1933 年, 1980 年再版。目次: はしがき, (1) 序説, (2) 秀才—入獄—アメリカ流浪, (3) 霧のロンドン, (4) イタリアの旅—エクセタ定住, (5) エブソム轉居—南歐の海邊—流浪の晩年, (6) ギッシングの窮乏, 年表, 書目, 索引。日本における最初のギッシング研究として価値がある稀覯本。誰の作を読むにしても作者の生活と思想とに結び付けて考えるべきだという著者の信念が端的に現われた評伝。『ライクロフト』と短篇だけしか知られていなかった当時, 「少しでもこの清純な知識の使徒の生涯と作品が, 我國によりよく知られれば」と思って, 「淺間山麓の信州追分の昔の脇本陣油屋の, 窓の下に山羊の鳴く静な部屋で書きあげ」られた。東大英文科卒の織田正信 (1903–45) は 41 歳で夭折したが, 翻訳としてウルフの『オーランド』(春陽堂, 1931), 『D・H・ロレンスの手紙』(紀伊國屋出版部, 1934), ハーディの『森に住む人々』(河出書房, 1940), スターン

の『風流漂泊』(新月社, 1948) などがある。ギッシングを過小評価した批評家・小説家フランク・スウィナトンの『ノクターン』(新潮社, 1940) を訳しているのは興味深い。

大塚幸男『閑適抄—ギッシングとともに』A5判, 211頁, 第三書房, 1975年。目次: 序, はしがき, 凡例, (1) 春, (2) 夏, (3) 秋, (4) 冬, 結びに代えて, 同じ著者によって, 人名索引。福岡大学の仏文学・比較文学の教授であった著者(1909-92)が, 愛読書『ヘンリー・ライクロフトの私記』から「心を打たれたくだりを選抄し訳出して, それにコマンテールを加えたもの」で, 古今東西の文学からの引用をちりばめながら著者自身の芸術観, 人生観, 自然観を披瀝したユニークな随想集。著訳書が60有余を数える著者の文章は年季が入っていて非常に味わい深い。矢野峰人, 石田幸太郎, 福田陸太郎といった往年の英文学の第一人者たちによる序文がある。『ギッシング・ニューズレター』第12巻第1号(1976)に小池滋氏の書評がある。古書として数は少ないが, オンラインショップで入手可能。

清水 隆『ギッシング研究序説』四六判, 246頁, 桐原書店, 1977年。目次: 序にかえて, (1) 作風の確立を目指して, (2) 理想の女性像を求めて, (3) 漂泊の痕跡を尋ねて, 主要参考文献, あとがき。現在札幌大学教授で日本の伝統文化をこよなく愛して常時和服を着用する著者が, 「不幸な作家の霊を東洋の片隅から弔ってやりたい」という願いから, 武蔵野女子大学時代の40歳の時に, それまで書いた論文をまとめた本。作品論としては, 『暁の労働者たち』, 『無階級の人々』, 『イザベル・クラレンドン』, 『人生の夜明け』, 『因襲にとらわれない人々』, 『三文文士』, 『余計者の女たち』があり, ギッシングの滞在と訪問の跡を辿って確認したイングランド, フランス, イタリア, ギリシャにおける作者ゆかりの地が詳説されている。アララギ派の詩人でもあった文学博士大和資雄氏による「序にかえて」がある。

清水 隆『續ギッシング研究序説』四六判, 192頁, サンエンタープライズ, 1990年。目次: (1) 作風の確立を目指して (Part II), (2) 理想の女性像を求めて (Part II), (3) 三つの中篇小説, 主要参考文献, あとがき。「續」が冠されたことで分かるように, 前著の体裁をそのまま踏襲した形で, 『民衆』, 『ネザー・ワールド』, 『流謫の地に生まれて』, 『サーザ』, 『女王即位50年祭の年に』, 『渦』, 『デンジル・クウォリア』, 『イヴの身代金』, 『埋火』の作品論が展開されている。

翻訳書

- 「田園生活」(「春」の 8 章) 戸川秋骨訳『趣味』(彩雲閣, 1909 年)
- 『鞭』(近代英文学概観) 矢口達訳(敬文堂, 1919 年)
- 『田園の春』(「春」の部) 戸川秋骨詳注(アルス英文叢書, 1920 年)
- 「結婚生活」宮島新三郎譯『英米十六文豪集』(新潮社, 1920 年)
- 『*The Private Papers of Henry Ryecroft*』(英文学叢書) 市河三喜注訳(研究社, 1921 年)(英米文學叢書, 研究社, 1954 年)
- 『田園春秋—ヘンリー・ライクロフトの手記』栗原古城訳(玄黄社, 1924 年)
- 『ヘンリー・ライクロフトの手記』藤野滋訳(春秋社, 1924 年)(春秋文庫, 1929 年)
- 『蠹魚・運命と薬剤師』(近代英文学叢書) 浜林生之助訳(健文社, 1925 年)
- 『ハウス・オヴ・コブウェプズ』(英和対照全訳ギツシング短篇集) 英文併記, 牧一・寺井邦男訳(広文堂書店, 1926 年)
- 『貧乏紳士』(英文学名著選: 第 6) 幡谷正雄訳註(健文社, 1926 年)
- 『美しい一家: 其他六篇』上司義信訳(早稲田泰文社, 1927 年)
- 『春の田園』(青年英文学研究叢書: 第 1 編) 英文併記, 山田惣七訳注(泰文堂, 1927 年)
- 『夏の田園』(青年英文学研究叢書: 第 2 編) 英文併記, 山田惣七訳注(泰文堂, 1927 年)
- 『秋の田園』(青年英文学研究叢書: 第 3 編) 英文併記, 山田惣七訳注(泰文堂, 1928 年)
- 『冬の田園』(青年英文学研究叢書: 第 4 編) 英文併記, 山田惣七訳注(泰文堂, 1928 年)
- 『蛛網とぞす家』(英和対訳本) 寺井邦男訳註(広文堂, 1928 年)
- 「春」英文併記, 山本供平訳註『英文世界名著全集』第 26 卷(英文学社, 1929 年)
- 「草堂の夏」(「夏」の第 8 章から第 14 章まで) 日夏耽之介訳『世界文学全集』第 36 卷(新潮社, 1929 年)
- 『蜘蛛の巣の家』佐藤緑葉訳(尚文堂, 1930 年)
- 『夏ノギッシング』(英學生文庫, 第 12 卷) 根本剛譯註(春陽堂, 1932 年)
- 『蜘蛛の巣の家』(英米近代文学叢書, 第 1 輯第 12 卷) 蒔田栄一訳註(春陽堂, 1932 年)
- 『蛛網の家』(英文訳註叢書, 第 30 篇) 堀英四郎譯註(外國語研究社, 1932 年)
- 『ヘンリー・ライクロフトの手記』谷崎精二訳(改造社, 1939 年)

- 『ヘンリー・ライクロフトの手記』栗原元吉訳（角川文庫，1939年）
- 『愛すべき一家，他七篇』水上齊訳（改造文庫，1941年）「クリストファスン」  
「地上の鹽」「詩人の旅行靴」「吾等のジャップ君」「持てる下宿人」「未製品」  
「ヤーマスブリッジの宿引」「愛すべき一家」
- 『ヘンリー・ライクロフトの私記』中西信太郎訳（岩波文庫，1946年）（新潮文庫，1951年）
- 『イオニア海のほとり』（英米名著叢書）佐々木理訳（新月社，1947年）
- 『蜘蛛の巣の家』（全2巻）吉田甲太郎訳（岩波文庫，1947年）（新潮文庫，1951年）
- 『ライクロフトの私記』玉井武訳註（健文社，1953年）
- 『蜘蛛の巣の家』佐藤利吉譯（角川文庫，1953年，1930年の佐藤緑葉は筆名）
- 『ヘンリー・ライクロフトの手記』佐野英一訳註（大学書林，1954年）
- 『蜘蛛の巣の家』（全2巻）山田惣七訳註（南雲堂，1954年）
- 『ヘンリー・ライクロフトの私記』（全2巻）平井正穂訳著（開文社，1954年）
- 『ヘンリー・ライクロフトの私記』（春，夏の巻）工藤秀雄訳（篠崎書林，1954年）
- 『境遇の犠牲者・塔のあかり』長谷川正平訳注（英宝社，1958年）
- 『ヘンリー・ライクロフトの私記：春』荒牧鉄雄編訳註（日栄社，1960年）
- 『ヘンリー・ライクロフトの私記』平井正穂訳（岩波文庫，1961年）（ワイド版岩波文庫，1991年）
- 『ヘンリー・ライクロフトの私記』菊池重三郎訳（筑摩書房，1963年）
- 『イギリス短編名作選』海老塚敏男編訳「門衛所の娘」（酒井書店，1966年）
- 『三文文士』土井治訳（北沢図書出版，1969年）
- 『詩人の旅行靴』田中義明訳註（大学書林，1970年）
- 『ヘンリー・ライクロフトの私記—春・夏』（英文世界名作シリーズ）徳永守儀訳注（評論社，1976年）
- 『ヘンリー・ライクロフトの手記』土方辰三訳（旺文社，1978年）
- 『ギッシング選集』（全5巻）小池滋責任編集（秀文インターナショナル，1988年）
- 第1巻『三文文士』土井治訳
- 第2巻『流謫の地に生まれて』溝上和雄訳
- 第3巻『余計者の女たち』太田良子訳
- 第4巻『埋火・イオニア海のほとり』土井治・小池滋訳
- 第5巻『チャールズ・ディケンズ論』小池滋・金山亮太共訳
- 『余った女たち』倉持三郎・倉持晴美共訳（ニュー・カレント・インターナシヨ

ナル, 1988年)

【渦】太田良子訳(国書刊行会, 1989年)

【ネザー・ワールド】倉持三郎・倉持晴美共訳(彩流社, 1992年)

【南イタリア周遊記】小池滋訳(岩波文庫, 1994年)

「校長の夢想」「塔の上の明かり」平戸喜文訳【折々の記】(熊本日日新聞情報文化センター, 1994年)

【ヘンリー・ライクロフトの四季随想】松田銑訳(河出書房新社, 1995年)

【ギッシング短篇集】小池滋編訳(岩波文庫, 1997年)「境遇の犠牲者」「ルーとリズ」「詩人の旅行かばん」「治安判事と浮浪者」「塔の明かり」「くすり指」「ハンブルビー」「クリストファーソン」

【駿足ヘスター】「インスピレーション」「クリストファースン」佐藤嗣二編訳【英国愛情物語傑作選】(文芸広場社, 1996年)

【無階級の人々】倉持三郎・倉持晴美共訳(光陽社出版, 1998年)

「めぐりあい」平戸喜文訳【イギリス名作短編集】(近代文芸社, 2003年)

#### 研究論文, エッセイ, 紀要に掲載された短篇の翻訳など

戦前の文献は1920年代に集中している。特筆に値するのはギッシング特集号となった1925年11月の【英語研究】(英語研究社)で, 論文として「ギッシング論の一つ」(福原麟太郎), 「ギッシングの研究には」(三浦太郎), 「ヘンリー・ライクロフトの世界」(杉田未来), 訳註として「天才者」(杉田未来), 「秋の小篇七つ」(三浦太郎), 「未製品」(久保田正次)が掲載されている。詳しくは Shigeru Koike, “Gissing in Japan,” *Gissing East and West* (London: Enitharmon, 1970) 1-10; Masahiko Yahata, “A Critical Enquiry into the Gissing Boom in Japan in the 1920s: The Special Gissing Number of *Eigo Kenkyu*, Vol. 18 (1924), no. 8” (*Gissing Journal* 34.4 (1998): 11-18 </gissing/yahata.html> を参照のこと。以下, 1950年以前の文献については省略する。

奥喜久男「A Study of George Gissing's Short Stories」【東邦学誌】(東邦学園短大) 7 (1950).

鈴木金太郎「ジョージ・ギッシングの手紙」【早稲田商学】85 (1950).

鈴木金太郎「ジョージ・ギッシングの初期の手紙」【早稲田商学】94 (1951).

尾上恒雄「貧困と文学—G・ギッシング覚書」【大阪女子大文学】2 (1951).

Uchida, Ikuo. “George Gissing and Ancient World—One of his Two Enthusi-



- asms”『大阪女子大文学』3 (1952).
- 内田郁雄「Gissing と Dickens—Gissing の enthusiasms の一つについて」『大阪女子大文学』5 (1952).
- 小池 滋「日本におけるギッシング」『比較文学』島田謹二編 (矢島書房, 1953).
- 高島由輝「ギッシング素描」『英語と英文学』(都立大)1 (1953).
- 玉井 武「「ヘンリ・ライクロフトの私記」に於ける田園の美について」『小樽商科大学人文研究』5 (1953).
- 藤井啓一「ジョウヂ・ギッシングの人間像」『英米文学研究と鑑賞』(浪速大) 1 (1954).
- 玉井 武「George Gissing—彼の読書について(1)」『小樽商科大学人文研究』13 (1956).
- 北田 勤「ジョージ・ギッシング抄—英吉利近代作家評伝(2)」『教養諸学研究』(早稲田大) 5 (1957).
- Kira, Matsuo. “The World of George Gissing.”『文科紀要』(東北大教養部)2 (1958).
- 増野正衛「スノップとダンディ—ジョージ・ギッシング」『海潮音』(山口書店, 1958).
- 深水 治「セナンクウルとギッシングに就いて」『法政大学教養部研究報告』4 (1959).
- 清水 隆「*The Town Traveller* について」『日本大学英文学会会報』11 (1961).
- Mitchell, J. M. “Notes on George Gissing’s Short Stories.”『英文学研究』(日本英文学会)38.2 (1962).
- 清水 隆「“A Poor Gentleman” と “Christopherson” について」『日本大学英文学会会報』13 (1963).
- 浜田公一「George Gissing の長篇小説について」『同志社大学法学部一般教養研究会研究』1 (1963).
- 中園安四郎「George Gissing に関する覚え書(1)」『神戸山手女子短大紀要』7 (1963).
- 佐野英一「気の毒な George Gissing の身辺—二つの書簡集を中心として」『成城文芸』33 (1963).
- 清水 隆「*New Grub Street* の人物構成」『日本大学英文学会会報』15 (1964).
- 原 智子「George Gissing (1857-1903) に就いて(1)」『戸板女子短大研究年報』7 (1964).

- 中園安四郎「George Gissingの覚え書き(2)」『神戸山手女子短期大学紀要』8 (1965).
- Koike, Shigeru. "The Education of George Gissing." *Studies in English Literature*, English No. 7 (1966). Rev. and rpt. in *English Criticism in Japan: Essays by Younger Japanese Scholars on English and American Literature*. Ed. Earl Miner. Tokyo: U of Tokyo P, 1972.
- 中園安四郎「George Gissingの覚え書き(3)」『神戸山手女子短期大学紀要』9 (1966).
- 内田郁雄「孤独、矛盾、友—ギッシングの一考察」『大阪女子大文学』(外国文学篇)19 (1966).
- 清水 隆「George Gissing の短篇小説研究」『武蔵野女子大学紀要』1 (1966).
- 清水 隆「Gissing の女性たち—Amy Reardonと Marian Yule の場合」『武蔵野英米文学』1 (1968).
- 清水 隆「George Gissing 研究—結婚とその文学への影響(1)」『武蔵野英米文学』4 (1969).
- 加茂儀一「ギッシング遍歴」『世界』288 (1969).
- 中園安四郎「George Gissing の覚え書き(4)」『神戸山手女子短期大学紀要』13 (1970).
- 清水 隆「George Gissing 研究—結婚とその文学への影響(2)」『武蔵野女子大学紀要』5 (1970).
- 小池 滋「ジョージ・ギッシング再考」『英語青年』116.4 (1970).
- 中野記偉「夏目漱石における G・ギッシング体験—「門」に関連して」『比較文学』15 (1972).
- 清水 隆「George Gissing : *Workers in the Dawn* 研究—'Gissing men and women' の誕生」『武蔵野英米文学』5 (1973).
- 中園安四郎「George Gissing: 'Workers in the Dawn' Vol. 1 から」『サピエンチア—英知大学論叢』7 (1973).
- 小池 滋「最近のギッシング研究」『英語青年』119.8 (1973).
- 清水 隆「George Gissing: *The Unclassed* 研究」『武蔵野英米文学』6 (1973).
- 清水 隆「George Gissing の女性像(2) *The Odd Women*」『武蔵野女子大学紀要』9 (1974).
- 大塚幸男「閑適抄—ギッシングとともに(1-2)」『福岡大学人文論叢』6.2-4 (1974-75).
- 大塚幸男「閑適抄—ギッシングとともに(3)」『福岡大学研究所報』23 (1975).

- 中園安四郎「George Gissing: 'Workers in the Dawn.' Vol. 2 から」『サピエンチア—英知大学論叢』9 (1975).
- 清水 隆「Gissing 行脚 (1) イギリス」『武蔵野女子大学紀要』10 (1975).
- 清水 隆「Gissing 行脚 (2) フランス・イタリア・ギリシア」『武蔵野女子大学紀要』11 (1976).
- 清水 隆「Gissing の変身—*Isabel Clarendon*」『'67 英文学論集』9 (1976).
- 清水 隆「George Gissing: *A Life's Morning* 研究—pure Victorian melodrama」『英文学論叢』(日本大学) 25 (1977).
- 内田郁雄「*Born in Exile* の主人公」『女子大学外国文学編』29 (1977).
- 中野記偉「漱石とギッシング—「草枕」をめぐる」『英語青年』(夏目漱石く特集) 122.10 (1977).
- 倉持晴美「ギッシングの結婚観—「余計な女たち」をめぐる」『東京成徳短期大学紀要』10 (1977).
- 高橋 久「George Gissing 覚書」『麻布獣医科大学教養課程研究紀要』11 (1978).
- 中園安四郎「George Gissing: 'Workers in the Dawn' Vol. 3 から(前・後)」『サピエンチア—英知大学論叢』11-12 (1977-78).
- 伊藤和男「「ヘンリー・ライクトフトの私記」覚え書」『松阪女子短期大学論叢』15 (1979).
- 奥喜久男「ギッシングと植物—生い立ちからライクロフトまで」『東邦学誌』(東邦学園短大) 10 (1979).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法 (1) 初期の女性像を追って」『武蔵野英米文学』12 (1979).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法 (2) by-plot と by-player の効用」『武蔵野英米文学』13 (1980).
- 中野康司「ジョージ・ギッシング『生まれながらの追放人(エグザイル)』—ちよっと華やかで物騒な、でもやはりイギリス小説だった」*Walpurgis* (国学院大学, 1980).
- Shimizu, Takashi. "Thyrza—one of the most beautiful dreams I ever had or shall have."『武蔵野女子大学紀要』16 (1981).
- Ono, Motoko. "Gissing's Quest in Art and Life: An Approach to *New Grub Street*."『英語英文学会研究紀要』(東京都私立短期大学協会) 11 (1982).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法 (4) "plotting" の系譜」『武蔵野英米文学』15 (1982).

- 清水 隆「Demos—或る“radical revolutionalist”の挫折」『武蔵野女子大学紀要』17(1982).
- 清水 隆「*The Nether World* 研究—「貧困」の図式」『'67 英文学論叢』15(1982).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法(5) 再び byplayers について」『武蔵野英米文学』16(1983).
- 梅宮創造「ジョージ・ギッシングの抒情」『英文学』(早稲田大学創立百周年記念特集号)59(1983).
- 北條文緒「教師を失った生徒たち—ギッシングの描いた女性たち」『東京女子大学紀要論集』34.1(1983).
- 奥本大一郎「本を枕に(7) 孤独な放浪者の夢想—ギッシング『ヘンリ・ライクロフトの私記』」『すばる』(集英社)5.9(1983).
- 奥喜久男「George Gissing, Plant Lover」『東邦学誌』(東邦学園短大)14(1984).
- 倉持晴美「ジョージ・ギッシングの小説における女性像」『東京成徳短期大学紀要』17(1984).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法(6) 性格描写の手法の発達」『武蔵野英米文学』17(1984).
- 清水 隆「Goerge Gissing: *Born in Exile* 研究」『'67 英文学論叢』17(1984).
- 加藤憲明「『ライクロフト』に見る自己実現」『湘南英語英文学研究』16.6(1985).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法(7) 新しい人物像の創造」『武蔵野英米文学』18(1985).
- 清水 隆「George Gissing: *Denzil Quarrier* 研究—storyteller としての資質」『武蔵野女子大学紀要』20(1985).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法(8) “storyteller” への道」『武蔵野英米文学』19(1986).
- 清水 隆「George Gissing: *In the Year of Jubilee* 研究—heroine's maturity を追って」『武蔵野女子大学紀要』21(1986).
- 清水 隆「George Gissing: *Eve's Ransom* 研究—発達史的視点に立って」『武蔵野女子大学紀要』22(1987).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法(9) “Yes, let the past be past.”」『武蔵野英米文学』20(1987).
- 大塚定徳「詩人の鞆」(翻訳)『鹿大英文学』1(1987).
- 清水 隆「George Gissing の小説技法(10) 女性像の複雑化」『武蔵野英米文

- 学] 21 (1988).
- 清水 隆「George Gissing: *Sleeping Fires* 研究—“an exuberant, eloquent little tale”」『武蔵野女子大学紀要』23 (1988).
- 夏目博明「虚構の田園—ジョージ・ギッシング論序章」*Otsuka Review* (大塚英文学会) 24 (1988).
- 並木幸充「一つの転機をめぐる—ジョージ・ギッシングの初期」*Metropolitan* (東京都立大) 32 (1988).
- 内田郁雄「ギッシングとイタリアの旅」『京都橘女子大学研究紀要』15 (1988).
- 八幡雅彦「George Gissing, *The Odd Women* 研究—父権制とフェミニズムの衝突」『別府大学短期大学部紀要』7 (1988).
- 梅宮創造「ヘンリ・ライクロフトと書物」『跡見英文學』2 (1989).
- 清水 隆「George Gissing: *The Whirlpool* 研究—人物構成の多様化」『武蔵野英米文学』24 (1989).
- 関 宮子「黎明期を生きる3様の女性たち—*The Odd Women* の“ambivalence”」『宮城学院女子大学研究論文集』69 (1989).
- 小池 滋「ジョージ・ギッシングと19世紀英国」『英語青年』(ヴィクトリア朝の文学と社会く特集) 135.1 (1989).
- Coustillas, Pierre, “The Relevance of George Gissing”『英語青年』135.5 (1989).
- Yahata, Masahiko, “A Study of George Gissing’s *New Grub Street* with Emphasis on the Contrast between the Practical and the Impractical”『別府大学英語英米文学論叢』21 (1989).
- 並木幸充「ジョージ・ギッシング論—*New Grub Street* の文学性」*Metropolitan* (東京都立大) 34 (1990).
- 村田靖子「Mobility あるいは自我の牢獄—*Born in Exile* をめぐって」『文化紀要』(弘前大学教養部) 32 (1990).
- 小林吉久「文学者に表われた精神構造の研究—George Gissing と夏目漱石を中心に」『国際関係研究』(日本大学国際関係学部) 10 (1990).
- 古舘正三「Exileの文学—G・ギッシング(小論1-2)」『富士大学紀要』23.1-2 (1990-91).
- 倉持晴美「『どん底』の稲妻」『共立国際文化』(共立女子大) 1 (1991).
- 八幡雅彦「ジョージ・ギッシングのアメリカ滞在中の短編小説—無記名作品を中心に」『別府大学短期大学部紀要』11 (1992).
- 小林吉久「ジョージ・ギッシングと夏目漱石の比較研究—その未来像を中心に」『大学院論集』(日本大学国際関係研究科) 2 (1992).

- 小林吉久「ジョージ・ギッシングと夏目漱石の比較研究—その自我の追求」  
『大学院論集』（日本大学国際関係研究科）3（1993）。
- 倉持三郎「*The Lost Girl* と *The Odd Women*」『英学論考』（東京学芸大）24  
（1993）。
- 倉持晴美「ギッシングの小説の背景」『共立国際文化』（共立女子大）3.1  
（1993）。
- 八幡雅彦「George Gissing, *The Odd Women* (1893) の「現代性」」『別府大学短期  
大学部紀要』12（1993）。
- 八幡雅彦「時計台の明かり」（翻訳）『別府大学短期大学部紀要』13（1994）。
- 下元輝明「博物館・図書館運動とジョージ・ギッシング」*The Northern Review*  
（北海道大）22（1994）。
- 小林吉久「ジョージ・ギッシングと夏目漱石の比較研究—美意識を中心に」  
『大学院論集』（日本大学国際関係研究科）4（1994）。
- 清水 隆「George Gissing の小説技法（11）新しい byplayer 像を求めて」『静  
修女子大学紀要』1（1994）。
- 清水 隆「George Gissing の小説技法—発達史的研究の一断面」『静修女子  
大学紀要』2（1995）。
- 田村道美「野上弥生子とジョージ・ギッシング—『田園春秋（「ヘンリ・ライ  
クロフトの手記」全訳）』」『香川大学教育学部研究報告』（第1部）93（1995）。
- 武田美保子「拘束と解放の狭間で—*The Odd Women* における記号的身体」『英  
語青年』141.4-5（1995）。
- 小林吉久「ジョージ・ギッシングと夏目漱石の比較研究—懐疑思想を中心に」  
『大学院論集』（日本大学国際関係研究科）5（1995）。
- 八幡雅彦「煽動者」（翻訳）『別府大学短期大学部紀要』14（1995）。
- 八幡雅彦「判事と悪党」（翻訳）『別府大学短期大学部紀要』15（1996）。
- Okada, Ayaka. “Positivism and Classicism: George Gissing’s *Workers in the  
Dawn* (1880).” *Colloquia*（慶応義塾大）17（1996）。
- 清水 隆「George Gissing 研究：*The Crown of Life*—「人生の戴冠愛の成就」  
『静修女子大学紀要』3（1996）。
- 牧嶋秀之「理想主義と現実感覚—ギッシングの『地獄』をめぐる」『葦笛』  
5（1996）。
- 牧嶋秀之「自己矛盾の苦悩—「ネザー・ワールド」を中心に」『成城英文学』21  
（1997）。
- 佐藤吉久・清水 隆「FEMINISM の比較研究（1）第19世紀末の一小説家の

- 場合」『北海道教育大学紀要(第1部A)』48.1(1997).
- Okada, Ayaka. "Classical References in Gissing's *Born in Exile* (1892)." 『芸文研究』(慶応義塾大) 74(1998).
- 小林吉久「ジョージ・ギッシングと夏目漱石の文明論」『大学院論集』(日本大学国際関係研究科) 8(1998).
- 八幡雅彦「俊足ヘスター」(翻訳)『別府大学短期大学部紀要』17(1998).
- 八幡雅彦「ジョージ・ギッシング「気まぐれプログデン氏」」(翻訳)『別府大学短期大学部紀要』18(1999).
- 小池 滋「ジョージ・ギッシング「解放」」(特集:知られざる小傑作)『英文学春秋』(臨川書店) 3.2(1999).
- Hashino, Tomoko. "The Story of Outsiders: *New Grub Street* and *Jude the Obscure*." 『えちゅーど』(お茶の水女子大学) 29(1999).
- 加藤芳子「ギッシングの『南イタリア周遊紀』」『札幌大学総合論叢』7(1999).
- Okada, Ayaka. "Burden of Time: *Fin de Siècle Bildungsromane* by Hardy and Gissing." *Colloquia* (慶応義塾大) 20(1999).
- 小林吉久「ジョージ・ギッシングと夏目漱石の社会観」『大学院論集』(日本大学大学院国際関係研究科) 10(2000).
- 小林吉久「ジョージ・ギッシングと夏目漱石の作品に於ける季節感の比較」『大学院論集』(日本大学大学院国際関係研究科) 12(2000).
- 大野佳代子「ヴィクトリア朝——「家庭の天使」になれなかった女たち——*The Odd Women* 研究ノート」『東海女子短期大学紀要』26(2000).
- 清水 隆「英国小説の realism 研究(1) George Gissing: *Will Warburton* (前)」『札幌大学総合論叢』10(2000).
- 清水 隆「英国小説の realism 研究(2) George Gissing: *Will Warburton* (後)」『札幌大学総合論叢』12(2001).
- 北條文緒「『ヘンリー・ライクロフトの私記』——日本における紹介と翻訳」『東京女子大学比較文化研究所紀要』62(2001).
- 松岡光治「ジェイコブ・コールゲ著「ギッシングの生涯と作品」(前)」(翻訳)『名古屋大学言語文化論集』24.1(2002).
- Komiya, Ayaka. "Gissing the 'Omarian': *Fin de Siècle Cult of Omar Khayyám* and Gissing's *Born in Exile* (1892)." 『慶応義塾大学日吉紀要: 英語英米文学』41(2002).
- 小池 滋「ジョージ・ギッシング: 2002年度春季大会特別企画ディケンズ批評——古典時代・発展の時代」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』

25 (2002).

光沢 隆「プロレタリアートか、職人か——Gissing の *The Nether World*」【中部英文学】(日本英文学会中部支部) 21 (2002).

清水 隆「英国小説の realism 研究 (3) George Gissing: *Veranilda* (1)」【札幌大学総合論叢】14 (2002).

松岡光治「ジェイコブ・コールグ著「ギッシングの生涯と作品」(後)」(翻訳)【名古屋大学言語文化論集】24.2 (2003).

Matsuoka, Mitsuharu. “George Gissing and Artistic Alienation.”【中部英文学】(日本英文学会中部支部) 22 (2003).

松岡光治「ギッシング讃歌——没後百年によせて」【英語青年】149.9 (2003).